
先生だいすき！シリーズ

すももっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先生だいすき！シリーズ

【Nコード】

N5218I

【作者名】

すももっち

【あらすじ】

佐伯夏子が化学の栗栖先生をこよなく愛するお話。
1話1話で起承転結になっております。
ちょーまったり更新ですが、いつも気にかけてます。
ぶっ飛んだ訳の分からないお話かもしれせん。
恋愛コメディ。

バレンタインデー編

あたしは一代決心を決めていた。

目的はただ一つ。

明日のことをさりげなく聞くこと。

「さりげなく」ってどこ、味噌ね。

あたかも

「あたしは別に？なんとも思ってますけど？ただ？やっぱ栗栖先生って人気らしーし？どうなのかなっていうね、好奇心ってやつ？みたいな？」

というのをアピールしたい。

え？何？

ツンデレでもなんでも好きに言うがいいさ！

ばれるのだけはご免なんだよ！

なんていうの？

カンに触る。

平たくいえばムカつく。

栗栖先生があーゆー性格なものだから。

まあ、あげるけどさ。

柄にもなく手作りする気まんまんだけどさ。

ハート型のチョコに「LOVE」とか書いて、

「俺もだよ佐伯」

みたいなさー！！

「せ、先生…」

「佐伯…」

あっ、だめ先生…！

校内でそんなハレンチな…。

きゃー！！！！！！

…て、いけないいけない。

妄想が大暴走しすぎだわ…。

なんてったって明日は…

「は？明日？…なんかあるのか？」

あたしが芸人だったなら、めっちゃめっちゃ上手くずっこけたと思う。表には出してないけど、心の中で綺麗にこけた。

そりゃないよ、先生…。

今じゃ世の中その話題で持ちきりなはずだよ？

知らないあなたは間違っています。

男としても人間としても不完全であります。

母親の腹の中から出直してこい。

「…知らないふりですか、それは？」

「ふりしてどんな利点があるんだよ」

…もうやだな。

なんでこんな鈍感ヘビースモーカー好きになったのかな…。

おまけに頭ぼっさばさだし。

白衣よれよれだし。

袖汚れてるし。

髭剃り怠ってるし。

なんであなたがそんなに人気者なの？

アイドントノー！！

ワタシハ、リカイ、デキマセーン！！

…英語は苦手です。

「明日は2月14日！バレンタインデーです！！」

「バレンタインデー？」

ま、まさかバレンタインデー知らないとか言わないよね…？

え、まさか…

「ああ。バレンタインデーね。明日だったんだ」

…………。

知ってんのかよ。

いっそ知らなかった方が清々しいわ。

なんだよ中途半端だな。

先生、あなたは芸人にはむいてないですね。

寂しいけどあたしとコンビは組めそうにありません。

「で、それが？」

え？

そこ聞く？

花の女子高生に向かって聞く？

普通スルーしてあげるとこでしょ？

デリカシーの欠片もありゃしない。

「えと…。きっと明日のご飯は用意しなくてもいいですね」

「はあ？」

な、何よその変なものを見るような目は…。

「だって先生人気だし、いろんなのたくさん貰えると思うからさ…」
なんで人気かはまっつったく分かんないけどね。

こんなくたびれた26歳のどこがいいんだか…。

あ、あたしは別だけど。

あたしはちゃんとしんと中身見て好きになったんだもん。

…きっかけは顔だけど。

「受け取らないよ。生徒からは」

「えっ？」

何？

なんだって？

生徒からはってどゆこと？

「なんで生徒限定？」

「教師通しには付き合いで渡さなきゃいけないってのがあるんだよ。
生徒にはそんなのないだろう？」

「それに生徒から物を貰うのはあまり関心できることじゃないしな」
……

確かに正論か……。

なんだ。

あたしの妄想はあっさり崩れた訳ね。

いーよーだ、別に！

裏を返せば誰からも貰わないんだしね！ふんだふんだ！

モテない男のただの言い訳じゃん！

「たのしみですねーあしたー」

「…なんでそこで佐伯が怒るんだ」

「え？あたしのどこをどー見たら怒ってるよーに見えます？これっ
っっぽっっちも怒ってませんけど」

「…あっそう…」

怒る訳ないでしょ。

どこに怒る要素があるってんだい。

＊

……………。

作ってしまった…。

受け取らない宣言されたのに…。

作ったのね、あたしは…。

しかもめっちゃめっちゃ手軽に作っちゃったってゆーね。

溶かして型作って固めた。

いわゆる普通の板チョコの味。

ははは。

もう笑うしかないね。

いろんな意味で。

さて、問題はこれをどうするかだが…。

普通に渡したって受け取らない訳でしょ？

なら無理矢理押しつけてみるか？

いやいや、そんなことしたって受け取るような奴じゃない。

なら女教師のふりして渡してみるか？

…すぐばれるよね。

いっそのこと告白するか！

はい論外。

あー！！！！

どーしたらいいのー！！

あ。

こっそり忍ばせてみるか…？

今までで一番いいアイディアじゃん。

よし。

やってやらー！

＊

先生はウソつきだ。

教師がこんな簡単にウソ吐いていいのかよ。

いや、ダメに決まっているのだ。

こーゆーの倒置法とかいったような…。

「…受け取ってんじゃない」

「受け取ったんじゃない」

「ならこのお菓子の山はなんなんだー！！！！？」

叫んだ。

叫んだよ。

ああ、叫んださ。

何よ？

あたしは悪くない。

ウソつき鈍感ヘビースモーカーが悪い。

100、いや120%悪い。

あたしには寸分たりとも非はない。

「欲しいならやるよ」

……………。

「……は？」

「ここにあるのは全部貰った訳じゃない。勝手に置かれてたんだよな、なるほど…。」

てか、あたしも似たようなことしようとした気が…。

しないね。

うん、しないしない。

「はあ…。これは予想外だったな。今時の高校生がこんな古典的なやり方をするとは…」

「古典的とはなんですか！失礼な！」

「は？」

あ、つい…。

「あの…、代弁代弁」

先生は不思議そうにあたしを見たが、何も言わなかった。言われても困るけど。

「いるか？」

綺麗に可愛く包装されたお菓子を、先生はあたしに見せた。

いやいや。

いる訳ないでしょ。

まったくもっていらないし。

「いりませんよ」

「そうか…」と先生はぼつりと呟き、おもむろに黒いゴミ袋を取り出した。

…て、ゴミ袋！？

「え、ちよちよ、何するんですか！？」

「何って？捨てる」

すてる……？

全部、捨てちゃうの…？

なんでだろう。

先生が受け取らないってこと、嬉しいはずなのに。違う。

心のどっかでは喜んでる。

でも全体が喜んでる訳じゃない。

また別の部分ではショック受けてるかんじ。
でもまた別のところでは怒ってる。

理由は簡単。

置いてった子たちとあたしは同じだからだ。

その気持ちたちが痛いくらい分かってしまうから。

「…それって、酷くないですか？」

「あ？」

「酷いと思います。その子たちの気持ち、考えてあげてください」
分かってる。

これはただのわがままだってことは分かってる。

分かってるけど言いたかったんだもん。

自分の中だけじゃ消化できなかったんだよ。

「だったら直接渡して来た奴らはどうなるの？ 勇気出して直接渡してくれた奴らを断って、誰かも分からないチョコを食えって？ それこそ酷いって言わないか？」

「でも……」

分かってる。

分かってるけど…。

「なら佐伯ならどうする訳？」

どうするって…。

……。

「…そうやってみなきや分かんない」

「答えになってない」

なんでそんな冷めた目で見るの…？

あたしはこんなに頭にきてるのに！！

「酷いと思ったんだもん！ しょうがないじゃん！！ それ以上でもそれ以下でもないわ！！」

これって逆ギレって言うのかな。

いやいや、言わないか。

先生キレてないし。

あたしが1人でわめき散らしてるだけ。

これがあたしと先生の歳の差？

なんか泣きたくなってきた。

「先生のばーか！人でなし！」

あーあ、やっちゃった。

思った時には時すでに遅し。

あたしは先生の顔めがけて、柄にもなく可愛いバレンタイン用に売られていた包みを投げつけていた。

おまけに学校飛び出してきた。

あれが放課後でよかったよ。

中身バラバラになっちゃったな、とか。

割れたハートなんてしゃれにもなんないな、とか。

どーでもいいことはすぐに頭を埋めてくれたけど、肝心なことになると真っ白だ。

明日学校行きたくないな。

先生の授業あるし。

気まずいよねえ、あんな言い方したんだし。

最後のなんかただのガキの悪口だもんな。

あぁー…。

完璧まですった…。

ノイローゼになりそう。

ま、いいや。

所詮、なるようにしかならんよ、世の中。
寝る。

寝るよあたしは。

*

「佐伯、俺のどこ放課後來なさい」

「…ほわい？」

て、苦手な英語を使いたくなるぐらいあたしは混乱した。

しかも先生は「聞こえません」というように角に消えてしまったし。嬉しいような、嫌なような…。

つまり複雑なんだよ。

恋する乙女の心ってつねに複雑なんだよ？

分かるかなあ、男性諸君に。

きっとあのウソつき鈍感ヘビースモーカーには分からないだろうがな！

＊

正座した。

床とかそんなんでもいい。

せめて座布団くださいなんて、今の状況では口が裂けても言えたもんじゃない。

なんでかって？

ものすごく恐ろしい悪魔みたいな2つの黒い目に見つめられてるからですよ。

そりゃもう恐ろしいのなんの。

昨日の気まずさなんかどこへやら。

その気持ちじゃ可愛くとかえ思えてしまう。

つまり異常ってことね。

「教師に向かってばか、人でなし、とは随分と肝の据わったことを言うようになったじゃないか。なあ、佐伯？」

う……。

いきなり痛いところを突いてくるよね。

しかも冷たい笑顔まで浮かべてる。

誰かこの可愛いうさぎ（あたし）を助けてください。

「おまけに顔を負傷させて貰ったし」
げ…。

あれストライクしちゃったんだ…。

何から何まで裏目に出ている気がするんだけど…。

「あの…、ごめんなさい…」

とりあえず謝っておこう。

あたしが悪いんだもんね。

ん…？

元をただせば先生か…？

「とりあえず謝るのはやめなさい」

はい、すいませんでした。

なんでもお見通しなのです。

もう太刀打ちできねーや。

「捨てるのはやめた」

「は…？」

と言ってから気付いた。

昨日のことか？

昨日のお菓子のことなのか？

…て、捨てるのはやめたあ！？

「人でなしと言われてまで捨てられないだろう」

はあ、と溜め息をつく先生は呆れ顔だ。

それよりも、だ。

あたしは先生を動かしたんだ。

この鈍感ヘビースモーカーの心を動かした。

それってすごくない？

あたしすごくない！？

えへへへ。

「…顔、緩んでるぞ」

ああ、いかんいかん。

お叱り真っ最中だったっけ。

「それで、捨てなくてどうしたんですか？もしかして食べ…」

「食べてないよ。俺はそこまでお人好しじゃない」

「でしようね」

「……」

そんなん予想の範囲内に決まっとうが。

伊達に片想い歴長くないってやつよ。

「全部あげた」

あげたんだ…。

捨てるよりはましなんだろうけど…。

うーん…。

なんとも言い難いよね。

だってあたしがあげたのを誰かに横流しされてたら結構ショックだもん。

捨てられるよりはショックじゃないけどさ。

「これ以上の譲歩はしない」

まあ、いつか。

あたしにはモテ男の気持ちは分からないように、先生にも恋する乙女の気持ちは分からない。

それでいいんだよね。

逆に分かる先生も気持ち悪いし。

それに。

先生なりに分かってうとしてくれたみたいだし。

今回はよしとしよう。

「あたしも結構じょーほしてるよね」

「あ？」

「いーえ、なんでもありません」

あたしは正座をやめた。

そろそろ足が限界なのよ。

もう先生の目怖くないし。

もう今日は帰ろう。

早く帰らないと寒さでやられる。
早く暗くなるし。

「佐伯、なんか忘れてない？」

「え？」

なんか？

忘れ物でもあるっけか？

…特にないよね。

「何ー？」

もう分かんないよー！

お上手ですわ。

先生はにやりと顔を緩めた。

「板チョコの味そのまんま」

「え…、はああ！？」

それって！！

それってさ！！！！

「食べたのー！！？！！？」

「俺当てなんでしょ？食べて悪いことはないだろう？」

えー！！？

え、何！？

どゆこと！？

貰わない、つか食べないんじゃないか！

なんでよりによって適当に作ったのを食べるのよー！！

「たださ、ハートが割れてただけど、なんか深い意味でもあるの？」

…ははは。

栗栖先生が鈍感で良かったよ。

…来年はもちよつと頑張ろうかな。

どうせ食べて貰えるんなら。

「ありがとう、佐伯。おいしくいただいたよ」

先生、あなたはあたしを殺す気ですか？

＊

ねえ先生。

こちらこそありがとう。

この気持ちをくれて、ありがとう。

なーんてね。

柄にもないこと言ってるけど、まじだよ？

ありがとね、栗栖先生。

バレンタインデー編（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

一応恋する乙女の気持ちを描写しているつもりでしたが、いかがだったでしょうか？

感想などいただけると嬉しいです。

夏休み編

本日から待ちに待った夏休みです。

そう、誰もが楽しみとする夏休みなはずなのです。

ほんの一握りの人間を除けばの話ですがね…。

「佐伯っ！ぶったるんどるぞ！授業に集中せんかぁ！」

はいはいすいませんね。

少人数なせいでサボりも適わない訳ですかね。

しかし、だ。

少しぐらい外見たっていいじゃないか。

勉強ばかりしていると頭おかしくなっちゃうんだよ、あたしの場合。普段が普段なだけにね。

勉強しすぎるとぼっぱらーになるんだよね。

しかも英語。

何があっても、誰が何と言おうと、英語は分からない。

暗記だと言うが、その暗記が出来ないんだからどうしようもない。

そのせいで夏休み返上で登校する羽目となってしまったのですよ。

神様はあたしに恨みでもあるのかしら。

…あるんだろうな、たぶん。

でもそんな地獄な補習にも、たった1つだけいいことがある。

それはあたしが恋して止まない化学の教師、栗栖先生に会えるから。

もしこの補習がなければ、夏休みは先生に会うことが出来なかったと思う。

そう考えれば地獄も地上に変わるというもんだ。

天国まではいかない。

だって大嫌いな英語を勉強するためにこの暑い最中を登校して、うららかな女子高生が汗水垂らしながら机に向かう。

焼けるし臭いし、これって最悪じゃん。

そう不満をべらべらと募ったところで現状が変わる訳じゃないけど。

でもさー。

言わなきゃ気が済まない。

くそーくそー。

英語のばかやろー。

あたしは日本人じゃ。

国内から出ないからさー。

頼むよーまじでー。

……。

はあ……。

そして夏休みはもう1つ、大イベントがあるのです。

みなさん、お分かりでしょう。

そう。

あたしの誕生日なんです！

佐伯夏子ですものね。

夏真っ盛りに産まれましたを、めっちゃくちゃアピールしてる名前ですものね。

8月10日。

あたしにとって運命の日であるのは間違いない。

＊

「ねえ先生？」

相変わらずあたしに背を向け続ける化学教師をものともせず、あたしはその背中に声を掛けた。

こんなのは今更であるのです。

慣れっ子であるのです。

「なんだ」

返事はちゃんとしてくれるけどね。

でもさ、誰しもが小さい頃に教わるはずのこと。

話は人の目を見てする。

教師のくせに出来てない。

しようもしない。

それってどうなの？

教育上あまりよくないのでは？

つか絶対よくないだろ。

芸人にも向いてないけど教師もダメじゃあ、まじでどうするの？

あたしが養うか？

……。

それもアリっていえばアリかも…。

「自分の世界から出てきなさい」

おぶ！？

あたしに背中を向けてるくせになぜ分かるの！？

まさか第3の目が後頭部に…。

うん。

ないよね。

あつたらどうしようかと思ったよ。

あたしのこの気持ちを持て余すところだったわ。

危ない危ない。

「あたしもうすぐ誕生日なんですよー」

先生が振り向いてないにも関わらずにあたしは笑顔を振りまいた。

自己宣告しなければならなのが悲しいところだが、そこまで欲は言えない。

それにそんな所で意地を張っていたら、知らぬ間に1年に1度の大会イベントを棒に振ることになる。

相手は教師。

受け身じゃ絶対に成就不再いえない。

いやいや、恋愛するのに受け身じゃいけない。

恋愛している人は覚えておいて！

「そうか。良かったな。おめでどう」

「……………」

何何何何？

なんなの？

素っ気なさすぎ！

いくらなんでもそれは痛いわぁ…。

いくら打たれ強いあたしでも、先生のそんな素っ気なさは結構効くよ？

せめてもうちょつとないの？

それとも期待してるあたしがバカなのか…。

あーあ…。

「それで？」

「…それでって？何がですか」

意識した訳じゃなかったけれど、不貞腐れた声が出た。これ以上あたしを落としてくれるな。

「なんだ。何かあって言ったんじゃないのか？」

むかつ。

なんか今むかってきた。

つかいらつときた。

欲は出すべきじゃないとは言ったけど、この反応はいかがなものか。少しは察したらどうなんだ。

あまりにも鈍感すぎるのも考えものだよ？

「別にいいですよー。先生になんか期待してないもんねーだ！」

「はぁ？」

あたしはバタバタと準備室から退出して行った。

先生が「おい」とかなんとか言ってた気がするが、この際なのでシカトすることにする。

先生なんか知らない！

孤独死でもすればいいんだ、あんな鈍感者！

＊

「夏子おめでとー!!」

補習仲間たちの朝の挨拶がこれだった。

嬉しい。

嬉しいに決まってる。

号泣とまではいかなくとも、ホロリと涙は頬を流れ落ちました。

そしてなんかプレゼントらしき包みまでいただきました。

夏休みの誕生日ってなかなかこういうのないからさー。

補習も捨てたもんじゃないかと。

と言っても、この補習も今日で終わるんだけどね。

会いたい。

だってこれ以降しばらく会えないんだよ？

会いたいよ。

でも、あたしはこの前あんな態度とっちゃったからなあ。

どうしよう…。

いや、ここは素直に行くべきだよ。

先生からの誕生日のお祝いがなくなたって、仕方ないって思えるよね？

これでしばらく会えないって寂しがってもらえなくても、しょうがないってなるよね？

先生の前で泣いたりしないよね、佐伯夏子？

先生の前で泣いたりしないよね、佐伯夏子？

＊

あたしは化学準備室の扉をがらりと開けた。

もちろんそこには白衣でボサボサ頭のいつもの背中がある。

その頭がちらりとこちらを振り返るのもいつものこと。

その美形なお顔がこちらをきょとんと見つめるのもいつものこと…。

な訳がない。

これはいつもと違うんですが。

「こ、こんにちは…」

とりあえず挨拶。

すると栗栖先生も軽く挨拶を返してきた。

「なんだ。怒ってたんじゃなかったのか」
むかつ。

怒ってたに決まっところーが。

それを抑えてやって来たんだろーが。

なんなんだ、いったい！

いやいや落ち着け。

こんなの逆上してたらせっかくの誕生日（最後の日）が台無しになるじゃないか。

「まあいいじゃないですか」

先生は「あ、そう」というような視線を寄越した。

本当はよくないんだけどね。

あたしが大人だから譲ってんだからね。

そこんところ間違わないようにしてもらわないと。

「そういえば、今日が補習最後の日だったな」

あ。

知ってたんだ。

ちよつとだけ嬉しいかも。

いや、あたしの言動のせいじゃないかもだけどさ。

それでも嬉しいじゃないか。

あたしのことを気に掛けてくれたという事実が。

「三島先生が褒めてたぞ。佐伯は無遅刻無欠席だったって」
えへへ。

三島たまにはナイスなこと言うじゃん。

英語キライだしうるさいからあんまり三島は好きじゃなかったけど、ちよつとだけ好きになってもいいかも。

ハゲって呼ぶのもやめてあげよう。

「やれば出来る子なんですよ、あたし」

あたしが言うと、先生は柔らかな表情を作った。
きゅーん。

甘い！

甘いよその顔は！

じゅ、寿命へったかな…。

この調子だとあたし早死にするな。

…………。

先生に削られるなら本望…？

なーんてね。

…………。

「先生、ごほうび」

気分が良くなったので少し調子に乗る。

仕方ないでしょ？

好きな人にこんな笑顔向けられてるんだもん。

「悪いが、教師として物を生徒にあげることは出来ないな」
がつくし…。

いやいや、分かってたけどね？

教師が生徒に物をあげるって行為がタブーなのはね。

でも恋する乙女としては期待するものがあるじゃない？

その時だった。

あたしの心臓が本気で一瞬止まった。

「補習頑張ったな。おつかれ」

うなだれたあたしの頭に、先生の大きな手。

優しくゆっくりと動くその手は、どうやらあたしの頭を撫でているらしい。

俯いているから良かったけど、今のあたしの顔は真っ赤だと思う。

イチゴとかリングとかそんな可愛らしいもんじゃない。

タコだ。

ゆでタコだ、絶対。

「それと、誕生日おめでとう」

「えっ!？」

なんで知ってんの!？

確かに今度誕生日とは言ったけど、明確な日にち教えてないよ!？
驚きのあまり先生にゆでダコ状態の顔を見せる羽目になった訳だが
…。

案の定、先生笑う。

「朝言われてただろ？」

あ。

確か補習仲間に大声で言われた気が…。

「あれだけ大々的だと、嫌でも耳には入る」

嫌でもって…。

失礼だ。

乙女に対して失礼だっ！

「それにしても早いなあ…。時が経つのは」

「え？」

「そうやってお前たちはどんどん大人になっていくんだろうな」

先生は遠い目で言った。

そんないきなり黄昏なくてもいいのに。

というか、あたしは早く大人になりたい。

早く大人になって先生と釣り合うような女になりたい。

子供のままじゃ、いつまでも教師と生徒なんだもん。

そんなのイヤなんだよ。

教師と生徒だからって断られたくないんだ。

時よ、早く流れて。

あたしを早く大人にして。

「佐伯？」

はいはい、なんででしょう？

「なんでお前が泣きそうになってるんだ？」

「泣いてませんっ！」

「いや、泣きそう…」

「泣いてませんっ!!」

「……………」

泣かない泣かない。

あたしは弱い乙女じゃないんだもん。

＊

早く大人になりたい。

だけど今も大切にしたい。

だって先生と毎日を共有できるって、本当に素晴らしいことなんだよ。

いつまでもこうしていたいって、何度思ったか知れない。

だけどその後思う。

ダメ。

大人にならなきゃって。

こうやって背伸びしてるあたしは、先生はどう見てるのかな？

ねえ、先生？

あなたはどっちがいい？

夏休み編（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

たぶんバレンタインデー編よりも夏子がぶっ飛んではないと思いますが、どうでしょうか？

感想などいただけると嬉しいです。

文化祭編

最近は文化祭の準備のせいで、逢引きをしていない。
誰とって？

鈍感ヘビースモーカー栗栖先生である。
たまに会っても、廊下ですれ違う程度。

その時に、

「栗栖先生！」

「ああ、佐伯。しっかりやってるか？」

「やっていますよ！そりゃあもう・・・！」

「そうか。頑張れよ」

終わり。

元々あたしの片想いなんで仕方ないとは思うけど・・・。
なんだこの簡潔な会話！

せめてもう少ししないの！？例えば、

「たまには会いに来いよ」

とかさ！

「佐伯が来なくて寂しいな・・・」

とかさとかさ！！

.....。

まあいいや。

そこまで欲を出さないにしてもだね。

もっところう・・・、なんて言うの？

.....。

あー！！！！

なんかめんどくさっ！

いろいろ考えるのめんどくせっ！！

そもそもなんであたしはあんなボサボサ頭好きなんだ！？
おかしいよ！

おかしいよね!?

そこが最大の汚点なのだよ、佐伯夏子!!
目を覚ませ、佐伯夏子!!

お前は間違ってるぞ、佐伯夏子!!

あー……。

なんだか無性に泣きだしたい気分だ。
はあ……。

「ねえ、あなた佐伯さん？」
落ちるなあ……。

せつかくの文化祭だっていうのに……。

「あの…、佐伯、さん…？」

あーあ……。

もうやだあ……。

「佐伯夏子さん!？」

「え、あたし？」

えーと……。

「…誰でしたっけか？」

「……………」

あたしの知り合いにこんな人いたかな…？

こんななんでもない日に頑張って髪巻く人はいないはずだけど。
化粧もしてるや。

しかも肌きれいだなー。

おしゃれさんだね。

「…私とあなたは初めましてよ」

「ですよねー！」

どうも初めまして。

「佐伯夏子さんよね？あなた」

「え、そうですけど…」

あたしって結構有名人だったの？

…………へ。

照れるよん。

「……私は工藤美佳。ちょっと話があるんだけど、今暇……よね」
をい……!

何その断定!

あたしそんな暇人そうに見えちゃうの!?

「……い、今忙しい」

あたしは忙しいんだ。

文化祭の準備あるし?

みんなあたしを頼りにしてるし?

「ならここでいいわ」

工藤美佳と名乗るおしゃれさんは、あたしにぐいっと顔を近付けた。

「文化祭の日、栗栖先生に告るから」

……………。

……………。

……………。

「……へっ?」

今、なんと……?

告る……………?

栗栖先生……………?

えっと……………。

「えええ!?!?」

おしゃれさんもとい、爆弾発言工藤美佳さんは、あたしから顔を離れた。

なんでか知らんが、彼女ではなくあたしが顔真っ赤だ。

「だから文化祭の日、邪魔しないでよね」

じゃ、邪魔ってあなたね……。

今まで誰の告白も邪魔した経験はありませんか?

あたしがきょとんとしていると、爆弾発言工藤美佳さんはふんと鼻を鳴らして、この場から去っていった。

なんかいろいろとインパクトのある人だったな……。

それよりも。

勇気のある人だなあ。

あの先生に告白しようと思うなんて。

あたしなんか…。

あたしなんかそんな勇気これっぽっちもありやしない。

……。

先生オツケーしたらどうしよう…。

勇気ないとか言ってる場合じゃなくなりそうじゃない？

＊

文化祭当日。

あれからいろいろ考えてしまった。

考えたって何かある訳じゃないんだけど、ついつい考えてしまうつてやつ。

恋したことある人なら誰だって経験あると思う。

……たぶん。

そして考えててふと思った。

あたしは閃いた。

なんで工藤美佳さんはあたしに宣言しに来たんだ？

あたしそんなに先生の周りうろちよろしてるっけか？

……いや、してるかもしれないけど…。

でもさ。

周りから見たら、あたしは先生とよく一緒にいるっていうふうに見られてるってことだよな？

…うへへへ。

なんか笑いが込み上げてしまいます。

しかしそれもすぐ止まる。

なぜなら不安が付きまとうから。

ないと思う。

きつとないとは思うけど…。

けどそんなの分からない。

あたしは先生じゃないし、先生のこと全部知ってる訳じゃない。

学校以外の先生のことなんか、これっぽっちも知らないんだ。

だから先生の女の人のタイプなんか知らないし、今までどんな人と何人付き合ってきたかも知らない。

聞きたいけど怖くて聞けない。

だってそれで先生のタイプがあたしとかけ離れてたら、すごいショックだし…。

先生が大勢の人と付き合っていたならば、あたしなんか眼中にも入らないと嫌でも理解できちゃうし…。

つまりあたしは臆病者。

違う言い方をすればズルい。

ただ先生のこと好き好き言って、でもいざとなるとなんにもできない。

そのくせ、工藤美佳さんみたいな人が出てくると、胸のあたりがもやもやするんだ。

もしも先生と工藤美佳さんが付き合ったとしても、あたしにはとやかく言う権利なんかない。

だってあたしは先生にとってはなんでもない、1生徒にすぎないんだもん。

……あたし最低だ。

「佐伯…?」

え……?

「せ、先生!？」

先生はどこか心配そうにあたしを見つめていた。

それよりもなんで先生がここに？

「なんて顔してるんだ、せっかくの文化祭の日…」
なんて顔？

あたしそんな変な顔してたのかな。

深刻そうな顔はしてたかもだけど…。

つかなんで今先生現れるかな…。

なんかタイミング悪い。

会いたかったけど、会いたくなかった。

…ああ、矛盾してるや。

頭ぐちゃぐちゃだー。

「どうした？なんかあったのか？」

だからね、今そんな優しくされると勘違いしちゃうじゃん。

あたし結構単純な生き物なんだよ？

いつもわずらわしそうにあたしのこと見るくせに、こういう時はすごく心配して優しく声を掛けてくれる。

きっと誰も気付かなくても、先生は気付いてくれる。

そんな錯覚に陥ったような感じ。

たぶん、あたしは先生のこんな所が好きなんだなあ。

「ねえ、先生」

「ん？」

「先生のタイプってどんなですか？」

「はあ？」

まあ、当然の反応でしような。

いきなり聞くようなことでもないだろう。

でもあたしの中ではそんな気分だったんだもん。

先生の顔はなんとなく見ることは出来なかった。

「いきなりなんでそんなことを聞くんだ？」

「聞きたいから」

あー…。

あたし最悪な女を發揮している…。

まずいのは分かってる。

頭ではよおっく分かってるんだけど…。

頭と言動がちぐはぐになっちゃってる。

もう黙ってた方がいい。

いいに決まってる。

だけど口はすごい軽かった。
カルカッタ。

.....

「大人で真面目で誠実な人」

頭を石で殴られた気分って、こんな感じなんだなあ。
辛い。

ヤバイ。

泣きそう。

なんで理想はこうもかけ離れているのだろう。

「でもそれはあくまでもタイプだから。頭ではそう思っても、実際は違うもんでしょ」

「実際、は...」

「そう。佐伯はそうじゃないの？」

あたし...。

あたしは？

あたしはどうなんだ？

あたしのタイプは、優しくてあったかくて面白くて...。
それって...。

真逆って訳じゃないけど、一緒じゃない。

つまりそういうこと？

あたしにもチャンスがあるってこと？

頑張ってもいい？

まだ一生懸命でもいい？

そしたら先生はあたしに振り向いてくれる？

「ねえ先生」

「今度はなんだ」

「ありがとーございました」

先生、ありがとう。

だいすきだよ、先生。

ありがとう。

「……何が」

「えっと、いろいろ？」

「なんだそれ」

先生が笑った。

そうなたらあたしの負けなんだ。

あたしの顔も緩んじやうよ。

まったくよー。

さっきまでの胸のもやもやどこいったんだよ。

帰ってこいとは言わないけど。

やっぱあれだね。

もやもやの原因は先生だったから、それを取り払えるのは原因の先生だけだ。

そもその不安の原因は工藤美佳さんだけど。そうだ！

工藤美佳さんのこと忘れてた！

「では先生、わたくしは持ち場に戻ります！」

クラス店の係をさぼる訳にはいきません。

後でどうなるか分かんないもん。

最悪ばこられる。

「もう大丈夫か？」

「いや、最初から大丈夫でしたから」

「……あっそ」

もう大丈夫。

いつもの佐伯夏子だ。

もやもやを無くしてくれたのは先生だ。

だからもう一度。

先生、ありがとう。

「佐伯」

その場を立ち去ろうとしたあたしを、先生が呼び止めた。

あたしは振り返って先生を見ると、先生は緩んだ顔でそこに立っていた。

「頑張れよ。でも無理するな」

がくってなった。

ずっこけた。

なんだそれ。

どんなアドバイスだ、おい。

まあいいや。

鈍感ヘビースモーカーの捨て台詞っぽいじゃないか。

ならあたしも。

「先生」

「なんだ」

「白衣がタバコ臭いよ」

「げっ」

＊

それにしても…。

気になる。

無性に気になる。

クラス店の係もそっちのけでそわそわしてるもんだから、クラスのみんなそれぞれにお叱りを受けた。

しかしそんなことも受け止められない。

とにかく気になるんだ。

さて、どうしたもんかね…。

抜け出そうか？

いや、それはまずい。

本気で殺されかねない。

でも抜け出す以外に方法なんかないよなあ。

正直に話してみるか？

ダメダメダメダメ!!

みんなに先生が好きなんてばれるなんてやだ!!

先生にばれるっていう次にやだ!!

あー…。

ん?

「工藤美佳さん…?」

教室の前を足早に過ぎ去って行ったのは、絶対に工藤美佳さんだった。

間違いない。

あんな綺麗に髪巻いて化粧してるのは工藤美佳さんしかいないもん。あたしは反射的に教室を出て、工藤美佳さんの後を追っていた。なんでか、放っておけなかった。

「工藤美佳さん! 工藤、美佳、さん!」

「なによ!!」

うお!?

工藤美佳さんは女子トイレでやっとあたしの声に振り返った。

うちの教室からこの女子トイレまで結構な距離あるよ?

「普通こんなとこまで着いてこないでしょ!?!? なんなのよ、あんた!」

なんなのよと言われても…。

あたしも最後の方は必死だった。

競争じゃないのは分かっているんだけど、もともと負けず嫌いな性格なもので、振り向けおらあ! 的な何かが生まれちゃった訳よ。

負けず嫌いな人なら理解してくれるだろう。

「…何の用よ」

「用っていうか…その…」

そんなストレートに聞ける程あたしはぶっちゃけちゃんではないので。

そこであたしは考え付いた。

ソフトに聞いてみよう。

「ある鈍感でヘビースモーカーでボサボサでよれよれ白衣の男に密談があったらしいけど、何かあったようななかったような気がするんだー。どう？」

「……あんたバカじゃないの？」

ばっ……！！

せっかくソフトに聞いてやったのに！！

「…振られたわよ」

……。

「決まってるじゃない。私はただの生徒だし？　こうやって頑張って髪巻いたって！　ばれないぐらいに薄い化粧したって！　あの人はなんにも気付かない！　髪切ったことにだって気付かないのに、最初から期待なんかしてないわよ！！」

なんて声を掛けていいのか分からない。

掛けなくてもいいのかもしれない。

どうしたらいいか分からない。

「でも好きだったんだもん。想いを伝えたいって思ったのよ…」

工藤美佳さんはそう言っとうつむいた。

ぐずぐずと鼻をすすする音がトイレ内に響いている。

「ねえ工藤美佳さん。先生のどこ好きになったの？」

制服のポケットに入っていたポケットタオルを工藤美佳さんに手渡した。

工藤美佳さんはそれを見て、次にあたしを睨み付けた。

「…なによ」

「いや、なんとなく」

工藤美佳さんは訝しみながらも、あたしのポケットタオルを受け取った。

そしてあろうことか鼻をかんだ。

お約束か。

直感だけど、工藤美佳さんとならいいコンビが組めそうな気がするよ。

「顔」

工藤美佳さんは即答した。

「うん、確かに！」

そしてあたしは便乗した。

「元の素材がいいんだよねー」

「そうなのよ！普段無表情なくせに時折見せる笑顔がたまらないのよ！」

「分かる！すごい分かる！！」

「あのボサボサ頭とか汚れた白衣とか、私がなんとかしてあげたくなっちゃうのよ！何？こう…なんて言うの…？ほら…」

「母性本能！」

「そう！母性本能くすぐられるのよ！」

「うん！！めっちゃ分かる！！分かりすぎて怖いぐらい分かる！！」
こういう話興奮するね！

なかなか出来る話じゃないもんで。

アイドルならまだしも、対象が学校の先生だからねー。

あたしがのほほんとそう考えていると、工藤美佳さんは深い溜め息を落とした。

なんだよ…？

「あんたと喋っていると調子狂う」

「話したの2回目ですが」

「両方狂ってんのよ」

「さいですか…」

褒められてはないだろうな。

工藤美佳さんってさらっと酷いこと言える人だね。

あんま悪い気がしないのは可愛いせいか？

…可愛いってズルい。

ただのひがみになってしまった。

「栗栖先生のこと好きな女子なんてたくさんいるけど、みんなあんたがいるから手は出さないのよ」

「え、あたし!？」

あたしそんなに虚勢張ってるかなあ…？

「いっつも先生にくつついてて、ストーカーみたい」

「す、ストーカー!？」

ちよっと酷くない!？」

あまりにも酷すぎないか!？」

ストーカーって…。

いくらあたしでもストーカーは落ち込むよ？

何言ってもいいとか思ってるでしょ。

意外と打たれ弱いんだよ、あたし。

「でもみんなあんたのこと悪く言ったりはしないでしょ？」

「う、うん…」

それはあたしが鈍感だからとかじゃなければだけどね。

「あんたのキャラがおかしいからよ」

「………」

もういちいち突っ込むとか落ち込むとかめんどくさくなった。

工藤美佳さんはどうあってもあたしをはい上がらせる気はないらしい。

「あんた見てると、影でこそそやってるのがバカらしくなるっていうか、嫌がらせしようとしてる自分たちが小さく見えるっていうか。とにかく! みんな身を引くわけ」

「あたしが、先生の近くににいるから…?」

「そうよ! でも私は諦めたくなかったの! あんたになんて譲りたくないと思った!！」

「うん」

「だから言ったの! 私だってやる時はやるのよ!！」

「うん」

「まあ、見事に玉砕したけどね」

そう言う割には、工藤美佳さんの顔は清々しそうだった。

あたしも先生に告白した後は泣いて泣いて、清々しくなるのかな。

なるといいな。

「あたしが告白したら、その後は工藤美佳さんが慰めてね」

「は?…意味分かんない」

とか言って。

まんざらでもない顔をしているじゃないのさ。

「それよりも、何よ、その工藤美佳さんって…?」

「だってなんて呼べばいいか分かんなかったし…。みっちゃん? かーちゃん?」

「……まじあんたうざいわ」

「ひどっ」

辛口みっちゃんということだ。

＊

あたしは結局クラス店の係をサボった形となり、クラス中から非難の嵐だった。

あの時は先も言った通り必死だったから、クラス店のことなんてぽっかり抜け落ちていたのだ。

仕方あるまい。

あたしはとりあえずたくさんクラスメイトに謝り続け、片付け後の居残り掃除で手を打っていただいた。

だからガランとし始める文化祭の放課後に、1人黙々と箒片手に掃除しているのです。

みんなは打ち上げの準備とか言ってさっさと帰っちゃったし。

あたしだって早く帰りたいのにー!!

って、あたしが悪いんだっけね…。

「佐伯、まだいたのか」

放課後掃除グッジョブ。

「栗栖先生!」

ご褒美だ。

神様があたしにご褒美くれたー！

ありがたやありがたや。

「もう下校の時間だぞ」

「はあい。もう帰りまあす」

あたしは箒を片付け、自分のサブバックを肩にかけた。
ん…？

ちょっと待てよ。

辛口みっちゃんはあたしが先生に付き纏ってるみたいな言い方したけど、でも今日先生と会ったのは先生から近付いて来たんだよ？
そうだよ！

断じてあたしが付き纏ってる訳じゃない！

あたしはストーカーじゃない！！

「先生！」

「…なんだ」

「あたしはストーカーじゃないですからね！！」

「はあ？」

あたしは言い置いて学校を出た。

その後先生が1人でクスクス笑って、

「意味分かんねえ」

と呟いたのは、あたしの知るところではない。

文化祭編（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

今回は別名ライバル登場編ということで、新キャラ登場しました。
濃いですね、彼女。

たぶんこれからもちよいちよい出てくると思います。

そして栗栖先生の出番少なめでした。

誠に申し訳ない…。

感想などいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5218i/>

先生だいすき！シリーズ

2010年10月15日09時30分発行